

【文化財の概要】 茂木七郎右衛門家住宅主屋、書院、新座敷、本蔵、新蔵、向蔵、奥文庫蔵、穀物蔵、正門、内門、煉瓦塀、書院北・東側土塀、書院南側板塀、琴平神社本殿、琴平神社神楽殿、琴平神社額殿（絵馬殿）、琴平神社手水舎^{ちようずや}、琴平蔵（18件）

茂木七郎右衛門家は、安永元年（1772）より屋号を柏屋として醤油醸造業を営み、明治20年（1887）の野田醤油醸造組合結成にあたり5代茂木七郎右衛門が頭取に就任、大正6年（1917）の野田醤油株式会社設立の際にも6代茂木七郎右衛門が社長に就任するなど、明治から大正にかけて野田の醤油醸造業に大きな役割を果たした。

主屋は主屋棟、土間棟、座敷棟からなる。外壁を黒漆喰とした重厚な趣で、座敷棟の各室も上質で往時の生活を伝えている。書院は座敷飾り、透彫欄間、シャンデリアなど瀟洒な意匠を持ち、また新座敷は関西風の建築で、背面側を大壁や鉄板張として防火対策が講じられている。主屋背面には本蔵と新蔵が並び建つ。正門は堅牢で堅実な趣を呈する薬医門。煉瓦塀、書院北・東側土塀は、ともに4メートルを超える防犯・防火に備えた高塀。書院南側板塀は書院の庭園に廻らす瀟洒な意匠の庭塀である。



主屋外観（玄関前）



書院外観



本蔵と新蔵



書院北・東側土塀

琴平神社は宅地東隣に境内を構える。創建は寛政元年（1789）、二代茂木七郎右衛門家が讃岐の金刀比羅宮から分祠した。本殿・神楽殿・額殿（絵馬殿）、手水舎ともに立川流たてかわりゅうの宮大工、佐藤庄助さとじのりたけ則久と里次則莊の建築である。

本殿は、向唐破風造の照り起り屋根むくを架け妻入とする屋根形式が特徴で、精緻な彫刻で充溢させた、立川流大工の技量が冴える近代社殿である。神楽殿も本殿と同様の屋根形式を持ち、擬宝珠高欄を廻らして舞台とし、後方に控室を付ける。内部の間仕切りに松羽目の鏡戸をたてた整った構えの神楽殿である。額殿（絵馬殿）は緩やかな起りをつけた切妻造の屋根をかけ、背面を板壁とするほかは吹放ちで土間とする。手水舎は強い照りを付けた切妻造の屋根をかけ、組物は三斗、妻飾を虹梁大瓶束とする本格的な形式である。



琴平神社本殿



琴平神社本殿唐破風



琴平神社額殿（絵馬殿）



琴平神社神楽殿



琴平神社手水舎